〈追悼文〉

出会い直し，尋ねそこねを，重ねながら

予備学校講師
大島保彦

今から四十年ほど前、野村俊明さんは、私を研究会に誘って下さいました。たしか、野村さんが学部（哲学）を卒業して大学院（教育心理学）へと進学されてしばらくした頃。私が学部（哲学）を卒業して大学院（比較文学比較文学）へ進学して間もない頃だと思われます。当時、埼玉大学教授（教育心理学）だった足立自朗さんが御自宅（など）でなさっていた小規模の読書会（勉強会）へのお誘いでした。ほんの数人の勉強会に、その後、私は十年くらい参加することになるのですが、野村さんは、ほどなくして参加しなくなります。

野村さんが読書会に参加しなくなった状況は、やがて、御著書『刑務所の精神科医』を拝読しているうちに、何となく推測できそうな気がしました。しかし、尋ねそびれてしまいました。

野村さんが私を読書会に誘って下さった理由は、今回、この文章を書き始めてようやく、少し思い当たってきました。ようやく、です。学部から大学院へ進学するにあたり、迷走状態にあった私を見守っていて下さったのですね。おそらくは、迷走の先輩として。

それから、三十年くらいの間、奇妙なことに、御茶ノ水の坂道の中ほど、車道を挟んであちらの歩道とこちらの歩道という感じで、野村さんとすれ違うことが、何度もありました。野村さんは、やや羞恥を含む仄かな笑みを浮かべていらっしゃる。私もぎこちなく笑みを浮かべて会釈するのみ。立ち止まって会話する雰囲気ではありませんでした。

そして、十年ほど前、野村さんは、コンタクトを取るべく、私の出講先の駿台予備学校へ連絡を下さいます。「大学で学生たちに話をしてみませんか？」と。

いろいろな調整をして頂き、私の予定も考慮して下さって、医療倫理学の授業で話をする機会を頂戴することになりました。私にしてみれば、教室内にいる学生の3割くらいは、すでに教えたことのある学生たち。他の学生たちも、ぜひと

も言葉をかけておきたい医学生たち。彼ら彼女らが大学入学以前に抱いていた思いをもう一度思い起こすきっかけとなるような話をするのが私の立場と思い、今日に至ります。

私の講義の回には、野村さんも教室内にいらして、ときには、掛け合いのように話が進むこともありました。それが、掛け替えのない時であったことを、今になって思い知ることになります。今回もまた、野村さんは、私に機会を与えて下さりながら、去られてしまいました。

野村さんは、御自分のことを強く出すことの少ない方でしたが、それでも色々なことをお伝え下さったように思います。受け止めます。思い起こし直します。そして、伝えていきます。

ありがとうございました。